

最優秀賞

テーマ…未来のための今を生きる
「未来へと築き上げる物語」

千葉県立千葉北高等学校3年 林芽菜

「急性骨髄性白血病の再発だと思う」

主治医が私に告げた、重すぎる現実。退院して1年が過ぎたころだった。初発のときには意識しなかった「死」という言葉が、私の頭の中を一人歩きする。不安や恐怖が追い打ちをかけるように襲ってきて、受け入れたくない事実を少しずつ飲み込んでいかなければならなかった。

「なぜ、自分が」。答えの出ない問いかけが頭をめぐる。気づけば自然と涙があふれていた。悲しいのか、苦しいのか、何の涙かさえ分かんなかった。心のどこかでは、いつか起こってしまうかもしれないと、覚悟していたつもりだったのに。誰も悪くない。行き場のない怒りや悲しみ、悔しさを、どこに吐き出せばいいか分からなかった。ただ漠然と「死」に対する恐怖だけが、私の中で大きくなっていった。

闘病生活は決して楽ではなかった。特に造血幹細胞移植のときは、気持ちも落ち込んでしまい、毎晩泣いてばかりいた。心配した看護師さんたちが交代で様子を見に来てくれたほどだ。

受け持ちの看護師さんが来てくれたとき、今まで我慢していたものがすべてあふれ出た。私は限界だったのかもしれない。「治療をやめてしまいたい。死んだほうが楽だ」。生きることをあきらめようとした。闘うことをやめようとした。私の言葉を聞き、看護師さんは泣いていた。

「気づいてあげられなくてごめん。何もできなくてごめん。今、芽菜はつらい思いをしているけれど、いつか夢をかなえて看護師になったとき、同じようにつらい思いをしている人たちを助けてあげてほしい。大丈夫。芽菜にはみんながついている。一緒に頑張ろう?」

もう一度、私に未来を見せてくれた。自分のために、ここまで一生懸命に考えてくれていた。「頑張れ」ではなく、「一緒に頑張ろう」という言葉が、スツとしみ込んできた。うれしくて、今までのことが嘘

みたいに力が湧いてきた。闘っているのは自分一人ではなかった。私だけの命ではない。

「絶対に大丈夫。生きる」。この日からの私の魔法の言葉だ。自分に言い聞かせるように気持ちが折れてしまわないように。何度も何度も繰り返した。「大丈夫、大丈夫」。

つらいこともたくさんあったが、私の入院生活の記憶の大半が、楽しい思い出。それはきっと、私に携わってくれた、たくさんの方の配慮があったからだろう。私は、みんなの力で生きていた。たくさんの支えや応援で病気に向き合い、闘うことができた。もしこのことに気づくことができなかつたら、私は今ここにはいないだろう。

「生きる」ということは、容易なことではない。「日常」は決して当たり前なんかじゃない。私が今、生きていること、笑って日常生活を送れること。それは、「奇跡」だと痛感した。何一つ、不自由のない生活を送っていたら、その「奇跡」に気づかないままだったろう。

一度は生きることをあきらめようとした。でも、あきらめなくてよかった。苦しいことを乗り越えた先で見ている景色は、毎日、キラキラとワクワクでいっぱいだから。「生きている」と強く感じる事ができているから。

小児科に入院していた私は、必死に生きようと懸命に闘う小さな戦士たちをたくさん見てきた。残念ながらもかなわず、空へ旅立ってしまった子もいる。そんな子たちが夢見た未来を、私は今生きている。だからこそ私は、自分に与えられた「今」を精一杯の力で、生きていきたい。「今日」という一日を生きていること。それはたった一つしかない、私だけの未来へと築き上げていく物語なのだから。